

臨床看護学

1 構成員

	平成19年3月31日現在
教授	2人
助教授	1人
講師（うち病院籍）	6人（0人）
助手（うち病院籍）	6人（0人）
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	29人（0人）
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	0人
合 計	44人

2 教員の異動状況

野澤 明子（教授）	（H13. 8. 1～現職）
大見サキエ（教授）	（平成17年4月～現職）
久保田君枝（助教授）	（H17. 4. 1～現職）
安田 孝子（講師）	（H16. 4. 1～現職）
永井 道子（講師）	（H16. 10. 1～現職）
宮城島恭子（講師）	（H17. 4. 1～現職）
佐藤 直美（講師）	（H18. 4. 1～現職）
森 恵子（講師）	（H18. 4. 1～現職）
倉田 貞美（講師）	（H18. 6. 1～現職）
杉山 琴美（助手）	（H16. 4. 1～現職）
足立 智美（助手）	（H16. 4. 1～現職）
瀬戸口希根（助手）	（H17. 5. 1～18. 12退職）
岩田 尚子（助手）	（H17. 10. 1～H19. 3. 31）
長崎ひとみ（助手）	（H18. 4. 1～現職）
牧野公美子（助手）	（H18. 4. 1～現職）
五十公野由起子（助手）	（H18. 5. 1～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成18年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	1編 （ 1編）
そのインパクトファクターの合計	0
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0編 （ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	2編 （ 2編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0編 （ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 大見サキエ, 須場今朝子, 高橋佐智子, 三輪ひとみ, 吉田裕子, 久野邦義: がんの子どもの教育支援に関する小学校教員の認識－A市における全校調査－, 小児保健研究, 66 (2), 307-314, 2007.

(4) 著 書

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 森恵子：第Ⅲ部 消化器と泌尿器の機能 15排泄 腸閉塞, がん看護コアカリキュラム（小島操子, 佐藤禮子（監訳）日本がん看護学会教育研究活動委員会（編集）. 263-266, 医学書院, 2007.
2. 森恵子, 秋元典子：術後消化管ケア 周手術期ケアの現在とエビデンス（井上智子, 野村英樹編集）. EBNURSING, 28-35, 2007.

4 特許等の出願状況

	平成18年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5 医学研究費取得状況

	平成17年度
(1) 文部科学省科学研究費	5件 （ 210万円）
(2) 厚生科学研究費	0件 （ 0万円）
(3) 他政府機関による研究助成	0件 （ 0万円）
(4) 財団助成金	1件 （ 200万円）
(5) 受託研究または共同研究	0件 （ 0万円）
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	1件 （ 150万円）

(1) 文部科学省科学研究費

1. 大見サキエ（代表者）萌芽研究 がんの子どもと家族の教育支援のための連携システムモデルの開発 50万（継続）

2. 宮城鳥恭子（代表者）若手研究（B）がんと子どもの日常生活における自己決定と親子のコミュニケーションを支える看護援助 70万円（継続）
3. 安田孝子（代表者）萌芽研究 つわり症状のある妊婦へのツボ刺激の有効性 30万円（継続）
4. 森 恵子（代表者）基盤研究（C）食道切除術を経験した食道がん患者の新たな嚥下方法獲得のプロセスを促進する看護介入 60万円（継続）
5. 森 恵子（分担者）基盤研究（C）若年子宮頸がん患者の初期治療に対する意思決定を支える看護実践モデルの構築 （継続）

(4) 財団助成金

佐藤直美（分担者）喫煙科学研究財団 喫煙行動と遺伝子多型 200万円（新規） 代表者 病理学第一講座 梶村春彦

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	3件
(3) 学会座長回数	0件	0件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	8件
(6) 一般演題発表数	1件	

(1) 国際学会等開催・参加

5) 一般発表

ポスター発表

1. Keiko Mori, Noriko Akimoto : Factors that narrow the living sphere of patients who underwent esophagectomy in the treatment of esophageal cancer. 2th International Conference Japanese Society of Cancer Nursing, 2007, 2/9-11, Tokyo International Forum (Japan).

(2) 国内学会の開催・参加

3) シンポジウム発表

1. 久保田君枝 「危機に立つ静岡県周産期医療」 静岡県母性衛生学会 静岡 7月
2. Keiko Mori, Noriko Akimoto : A study on difficult experiences of postoperative esophageal cancer patients following ante-thoracic subcutaneous route reconstruction. 6th Kyungpook-Hamamatsu Joint Medical Symposium (KHJMS) Hamamatsu Meeting, 2006.10/26-27, Hamamatsu University School of Medicine (Japan).
3. 永井道子：看護師を対象にした心の健康づくり研修の効果，第26回日本社会精神医学会，パネルディスカッション，3月，横浜

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

野澤 明子 日本糖尿病教育・看護学会 専任査読員
野澤 明子 日本慢性看護学会 評議員
大見サキエ 日本看護医療学会 専任査読委員
大見サキエ 日本小児看護学会 専任査読委員
大見サキエ 日本看護学教育学会 評議委員
久保田君枝 日本母性衛生学会 評議員
久保田君枝 日本看護医療学会 評議員
久保田君枝 静岡県母性衛生学会 理事

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0件	0件

9 共同研究の実施状況

	平成18年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	7件
(3) 学内共同研究	3件

(2) 国内共同研究

1. 黒川恵子, 浅井くに, 加藤佳寿美 (磐田市立総合病院), 野澤明子, 初めての出産を予定する妊婦の母性準備性に関する研究
2. 佐藤直美, 野澤明子, 相村春彦, 新村和也, 名倉聖子 (病理学第一), 谷岡書彦 (磐田市立総合病院臨床検査科), 吉田輝彦 (国立がんセンター研究所腫瘍ゲノム解析・情報研究部), 生活習慣とがんの罹患に関する疫学研究
3. 安田孝子, 大見サキエ, 巽あさみ, 矢野忠 (明治鍼灸大学), 笹岡知子 (明治鍼灸大学), 島田三恵子 (大阪大学大学院), つわり症状のある妊婦へのツボ刺激の有効性
4. 久保田君枝, 福岡欣治 (静岡文化芸術大学), 望月聖子 (静岡済生会病院), 須佐智子 (駿河看護専門学校), 永谷実穂 (静岡県立大学短期大学部), 助産師の主体的出産への説明・実施とセルフエスティームの関係
5. 安田孝子, 矢野忠 (明治鍼灸大学), 笹岡知子 (明治鍼灸大学), 永田勝太郎, 広門靖正 (東邦大学), 久保田君枝, 更年期女性へのツボ刺激の有効性
6. 中山洋子 (福島県立大学), 戸田肇 (北里大学), 田村正枝 (長野県立大学), 小松万喜子 (愛知県立大学), 土居洋子 (大阪大学), 石井邦子 (千葉大学), 永山くに子 (富山大学), 東サトエ (鹿児島大学), 石原 昌 (昭和大学), 大平光子 (山形大学), 大見サキエ, 他, 看護実践能力の発達過程と評価方法に関する研究
7. 大見サキエ, 宮城島恭子, 瀬戸口希根, 岡田周一, 河合洋子 (名古屋市立大学看護学部), 鈴木恵理子 (聖隷クリストファー大学看護学部), がんの子どもと家族の教育支援のための連携

システムモデルの開発

(3) 学内共同研究

1. 佐藤直美, 相村春彦, 奥寺康司 (病理学第一), 松井隆 (医学部附属病院), 喫煙行動と遺伝子多型
2. 久保田君枝, 安田孝子, 足立智美, 県内における学生の助産師希望と助産師の充足の現状
3. 安田孝子, 久保田君枝, 足立智美, 県内における看護学学生・施設管理者・助産師の助産師教育への希望と教育制度の認識

10 産学共同研究

	平成18年度
産学共同研究	0件

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

1. がんの子どもと家族に対する教育支援のための連携システム開発に関する研究

A市, B市における小学校教員のがんの子どもと家族に対する理解を促進するために, 啓発・啓蒙のための研修会を開催し, その有効性を確認した。また, 復学支援として退院時に, 患児・家族, 地元校の教員, 院内学級教員, 医療者の合同会議を開催し, 子どもと家族がスムーズに学校に適應できるようにした。これらの活動は, 教員の病弱児に対する特別支援教育への関心を高め, 医療機関との連携の糸口として機能してきている。

(大見サキエ, 宮城島恭子, 瀬戸口希根, 岡田周一, 河合洋子 (名古屋市立大学看護学部), 鈴木恵理子 (聖隷クリストファー大学看護学部))

2. 看護実践能力の発達過程と評価方法に関する研究

臨床現場では看護実践能力の低下が取りざたされている。看護大学を卒業後, 新人看護師が看護実践能力をどのように身につけ, 成長していくのか明らかにされていない。そこで看護実践能力の発達過程を明らかにすると共に, 実践能力を評価するツールの開発に着手した。今年度は, 国内・国外の文献を参考に看護実践能力の概念規定について検討した。

(大見サキエ, 研究代表者: 福島県立医科大学看護学部 中山洋子)

3. がんの子どもの日常生活における自己決定と親子のコミュニケーションを支える看護援助に関する研究

思春期の外来通院中のがんの子どもと, 健康な思春期の子どもの日常生活における自己決定と, 県連因子を把握する質問紙を作成した。健康な思春期の子ども (小学5年生~高校3年生) を対象に, 質問紙と面接法で予備調査を実施した。予備調査を踏まえ, 小児看護研究者のスーパーバイズを得ながら質問紙の内容を再検討した。今後, 本調査を行い, 思春期のがんの子どもと健康な子どものそれぞれの特徴と共通性・相違性を分析し, 看護援助の検討を行う予定である。

(宮城島恭子)

4. つわり症状のある妊婦の弁証と自律神経の関連性

50～80%の妊婦が経験するつわりの症状は多様であり、嘔気、嘔吐、食欲不振や食欲亢進などの消化器症状や、唾液の分泌亢進と口渇などの自律神経の失調傾向、肩こり、疲労感、頭痛などがある。中国伝統医学の身体の状態を判断する弁証の考え方を取り入れ、つわり時の弁証と心拍変動の周波数解析により自律神経との関連性を明らかにしている。

(安田孝子, 矢野忠¹, 笹岡知子¹, 大見サキエ, 巽あさみ, 島田三恵子²) ¹明治鍼灸大学, ²大阪大学大学院

5. 更年期女性の弁証とツボ刺激の有効性の検証

45歳から55歳までの更年期の女性に対して、マッサージ（推拿）によるツボ（経絡の上の経穴）刺激を行って、ツボ刺激の有効性を判定している。評価指標として心拍変動の周波数解析、血圧、明治鍼灸大学式弁証スコア、小山らの簡易更年期指数、日本語版健康関連QOL尺度のSF-8TMアキュート版を用いている。

(安田孝子, 矢野忠¹, 笹岡知子¹, 久保田君枝, 永田勝太郎, 広門靖正²) ¹明治鍼灸大学, ²東邦大学

6. 県内における看護学学生・施設管理者・助産師の助産師教育への希望と教育制度の認識

助産師に関する社会的な問題は、安全で満足できる出産のケアの提供の在り方、大学院や4年制大学、専攻科、専門学校などの教育制度の多様化、就業場所の偏在、産科と小児科医医師の減少による産科診療の閉鎖、助産師の恒常的な不足などがある。静岡県の看護学学生や病院や診療所の管理者、そして臨床で働いている助産師に対して、助産師教育への希望と教育体制の認識に関して質問紙調査を行い、今後の助産師教育の方向性を明らかにした。

大学、短期大学、専修学校の看護学の教育機関と病院・診療所の管理者へはがきによる意向調査後、協力の得られた施設に質問紙調査を実施した。教育機関は13校、学生1178名のうち有効回答数969名（回収率82.3%）、病院20、診療所22施設から回答を得た。管理者46名中有効回答29名（回収率63.0%）、助産師319名中有効回答数237名（74.3%）であった。学生の助産師資格希望者は188名（19.4%）、進学するとしたら修士課程希望者263名（27.1%）、専攻科626名（64.6%）であった。助産師の充足状況について、管理者は不足18名（62.1%）、助産師は、不足123名（53.0%）であった。教育機関別の認識は、三者ともに専攻科が高かった、しかし専門職大学院、大学院修士課程は低い結果であった。学生は専攻科による助産師の資格取得を希望していることが示唆された。

(安田孝子, 久保田君枝, 足立智美)

7. 県内における学生の助産師希望と助産師の充足の現状

助産師に課せられる専門職としての質、量共に高いレベルに対応できる助産師養成を考え、当大学看護学科は大学院または専攻科での養成課程に改組することを計画した。本調査は改組に向けての基礎データを取得する目的でおこなった。郵送留め置き法による質問紙調査をS県内で協力の得られた管理者29名（回収63%）、助産師237名（回収率74.3%）教員129（回収率64.8%）、学生

969名（回収率82.3%）に助産師養成課程，進学希望などについて回答を得た。学生の助産師資格希望は188名（19.8%）5人に1人が希望していた。進学希望の教育課程は専攻科284名（29.3%），専修・専門学校256名（26.4%），修士課程135名（13.9%）専攻科の希望者が多かった。助産師の就業施設における充足状況は不足している123名（53.0%），充足している56名（24.1%）。管理者が助産師不足を認識しているのは18施設であることから助産師養成の増員が求められる。回答者の多くが改正後の助産師養成課程の認知が低かった。教育課程別の特徴を周知していく必要性が示唆された。

（久保田君枝，安田孝子，足立智美）

8. 助産師の主体的出産への説明・実施とセルフエスティームの関係

妊産婦が自ら望む「主体的な出産」を実践できるよう，助産師が分娩・産褥期を通してどの程度の説明をおこない，また実際に実施しているか，またこれらと助産師のセルフエスティーム（以下SE）との関連性を検討した。S県内で協力の得られた21施設の病棟助産師258名に質問紙調査（郵送回収）を行い，187名から回答を得た（回収率72.5%）。主因子法・バリマックス回転による因子分析の結果，「説明」「実施」は4因子抽出された。説明のうえで実施された度合いを示す指標として各項目につき両者の評定を掛け合わせたもの（以下「結合」）も算出したところ，5因子抽出された。これらの第1因子は「分娩時の処置」であり共通していた。SEの高低を被験者間要因，「説明」「実施」「結合」の各因子を被験者内要因とする2要因分散分析を行った結果，いずれも交互作用は認められなかった。因子の主効果はいずれも有意であり，「分娩時の処置」の得点が高く，下位の因子の得点は低かった。SEの主効果は「説明」「結合」で有意でありSEの高い人ほど説明をよくおこなっていた。SEは「実施」だけで見ると関連性がないが，説明およびそのうえでの実施度とは関連性があり，主体的な出産への働きかけに関係していることが示唆された。

（久保田君枝，福岡欣治¹，永谷実穂²）¹静岡文化芸術大学，²静岡県立大学短期大学部

9. 看護師を対象にした心の健康づくり研修の効果

本研究の目的は，看護師のメンタルヘルスを向上させるための研修プログラムを開発・展開し，その効果を明らかにすることである。看護師9名を対象に，講義と体験学習を取り入れた心の健康づくり研修を4回行った。各体験学習の後に振り返りを十分に行い，その内容を質的に分析した。また，研修の前後で評価尺度の数値を比較した。その結果，「自己理解の促進」「自己表現の促進」「意欲の向上」「精神面の充実」等の主観的効果が得られ，研修後に自尊感情が高まった。その反面，情緒的消耗感の数値が増加し，今後の検討課題となった。研修により自己理解と自己表現が促進し，より事実に近い回答になったためか，あるいは，研修を休日に行ったため休息する時間が減少したことが原因かもしれない。看護師のメンタルヘルス対策として労働条件を改善していくとともに，メンタルヘルスを向上させるための研修を勤務時間内に取り入れていくことが必要と考えられた。

（永井道子，佐々木省子，牧野公美子，白柳清香，長谷川桃子）

10. 成人看護学実習におけるインシデント体験の探求

臨地実習の実際の場面では、学生の提供する看護行為が未熟だけでなく、状況も複雑であり、学生だけでなく教員もヒヤリとする経験をしている。現在、医療事故へつながる危険性を察知し、未然に防ぐためにインシデントレポートを活用しているが、学生がインシデントを記載することによってうける精神的ショックをできるだけ軽減するためにも、学生のインシデントの経験を探ることが重要であると考えた。そこで、成人看護学実習におけるインシデント経験を探求することを目的とし、インシデントレポートに記載されているインシデントの経過、原因・要因、教員・指導者からうけた指導などの自由記載についてKJ法を用いて分析する。

(村上静子, 杉山琴美, 野澤明子)

11. 喫煙行動と遺伝子多型

ニコチン依存をはじめとする喫煙行動に対する遺伝子多型の影響について明らかにすることを目的とし、65歳以上の地域総合病院外来患者について、喫煙行動に関する調査結果と遺伝子解析結果の統計学的分析を行った。遺伝子解析はドーパミンD2受容体 (DRD2) 遺伝子Taq I A多型について行った。その結果、DRD2遺伝子のTaq I Aの3つの多型と喫煙状況の分布について有意な偏りは見られなかった。ニコチン依存度を示すFagerstrom Test for Nicotine Dependenceの得点や喫煙行動を示す他の指標とこの遺伝子多型との関連についても有意な結果は得られなかった。質問紙の内容を再検討し、さらに多面的な遺伝子解析が必要である。

(佐藤直美, 相村春彦, 奥寺康司, 松井隆)

12. 食道切除術を経験した食道がん患者の新たな嚥下方法獲得のプロセスを促進する看護介入に関する研究

食道がんのために食道切除術を受け、自宅で生活している食道がん患者30名を対象に、患者が直面している、嚥下障害をはじめとする生活上の困難及びそれらへの対処の実態を明らかにすることを目的に、自由回答法による半構成面接を実施した。食道切除術後の再建方法は、胸壁前皮下経路再建術を受けた患者が17名、後縦隔内経路再建術を受けた患者が12名、胸骨後経路再建術を受けた患者が1名であった。面接内容を逐語訳し、Krippendorff Kの内容分析の手法を用いて、質的・帰納的に分析を行った。分析の結果、食道がんのために食道切除術を受けた患者が抱える術後の生活上の困難は、【予想をはるかに超えて苦痛と化した摂食行動】【生活圏の狭小化】【ボディ・イメージの変化】【胃液・食物の逆流に伴う苦痛感】【再発・転移の不安】【社会生活継続への懸念】の6の大表題に集約された。また、食道がんのために食道切除術を受けた患者が抱える術後の生活上の6つの困難に対する対処法は、《生きるために自分流の食べ方を体得する》《時間をかけて変化に慣れる》《命と引き換えに変化を受け入れ行動する》《逆流を防ぐための方策を捜し求める》《定期的に病院を受診しながら用心して生活する》の5つの大表題に集約された。本研究成果は、科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書として提出した。

(森恵子)

13. 上部消化器がんのために手術療法を受けた患者が抱える食行動への影響が、術後の健康管理行動に与える影響に関する研究

上部消化器がん（食道がん、胃がん）のために手術療法を受けた患者が抱える食行動への影響が、術後の健康管理行動にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的に、退院間近の対象者に自由回答法による半構成面接を実施。現在2名の患者にインタビューが終了している。今後面接を継続し、逐語訳あるいは、面接内容の筆記を質的データとし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（MGTA）の手法を用いて分析を行う予定。

（森恵子）

14. 乳房温存術が乳がん術後患者の社会復帰希求に及ぼす要因に関する研究

乳房温存術を受けた乳がん患者の体験が、社会復帰を希求する気持ちにどのように影響しているかを明らかにする目的で、乳がんのために乳房温存術を受け退院時期が決定している患者4名に対して、自由回答法による半構成面接を実施した。面接内容の逐語訳をKrippendorff, K.の内容分析の手法を用いて分析した。分析の結果、乳房温存術を受けた乳がん患者の社会復帰希求を促進する体験には【退院後に関わる人へは乳がん罹患を告白する】【辛い気持ちを自分の中にとどめる】【これからも女性でいられることに安堵する】【温存乳房の形態にこだわりを持つ】【年代による乳房のあるなしへのこだわりの違い】【健康に生活することに価値の転換を図る】【今まで通り生活を送ることを希望する】【温存術後の乳房に対する間違ったイメージを変えるための啓蒙活動へ意欲を持つ】の8つが、社会復帰希求を阻害する体験には【乳がん罹患のために人生設計の変更を余儀なくされた悔しさ】【転移、再発、術後の追加治療に伴う副作用の不安】【同僚に迷惑をかけるのではないかという思いから社会復帰を躊躇する】【“がん”という言葉の使用を意識する世界へ戻ることの不安】【手術操作に伴う症状、病理診断未確定のままの退院による、不確かな退院後の治療・生活への不安】の5つが明らかとなった。本研究成果は、第12回日本緩和医療学会総会にて発表した。

（森恵子）

15. 胃がんのために胃切除術を受けた患者が体験する「食べる」ことへの思いに関する研究

胃がんのために胃切除術を受けた患者が体験する「食べる」ことへの思いについて明らかにする目的で、胃がんのために胃切除術を受けた退院間近の患者5名に対して、半構成面接を実施した。面接内容の逐語訳を質的データとし、Krippendorff, K.の内容分析を実施した。分析の結果、胃がんのために胃切除術を受けた患者が体験する「食べる」ことへの思いには、肯定的な思いを表す【胃切除術後の絶食期間を乗り越え再び食べられたことへの喜び】と、否定的な思いを表す【食べることに絶えず不安と恐怖を感じながら意識して食べる】【食べることが"楽しみ"から"厄介な仕事"に変化する】【摂取可能量減少に伴う体重減少への不安】【調理する楽しみを失うのではないかという不安】が明らかとなった。患者は、《自分流の食べ方を模索しながら生活することで、将来的には罹患前のように食べられるようになると希望を持つ》《胃切除術後の食行動の変化を仕方がないと捉え、上手く付き合いながら今の食べ方に慣れていく》《胃がんへの罹患が食生活を見直すきっかけとなり、健康探求へ価値の転換を図る》《30代での胃がん罹患、食べる楽しみを失ったことを人生の試練と捉える》《いつかこの体験がいかせると信じて第2の人生を生きていく》《家族のために元気になりたいと思う》という対処を行っていた。本研究成果は、第12回緩和医療

学会総会で発表した。

(森恵子)